

勉強通信

Bensey Newsletter 第十二号

2009.10.15

小論・研究余滴・随想

中国残留日本人との邂逅

漱石は実際に〈琴^{きん}〉の音を
聴いていたか。 その一

『信長記』 研究は終わらない

ネットワーク時代にふさわしい
図書館情報学

記録を守り 記憶を伝える

日本近代文学と宗教

てんぷらの語源 (二・考証)

蘭 信三

上 原作和

金子 拓

緑川 信之

安藤 正人

綾目 広治

小林 祥次郎



新刊・近刊ニュース

・人間愛叢書 『生命讃歌 お伽噺』

・『川村湊書評集 あのことろ読んだ小説』

・『立松和平書評集 物語を生きる小説家の至福』

・『朝鮮民譚集』

・『中国故事受容論考』

・『勅撰和歌集入門』

・新編森克己 『続々日宋貿易の研究』
著作集3

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

勉強通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

中国残留日本人との邂逅

あらいぎ
蘭 信三

(上智大学外国語学部国際関係副専攻教授)

一 邂逅への憧れ

邂逅という言葉に憧れた時があった。この言葉を知ったのは小学校高学年の頃で、この言葉に憧れまだ見ぬ人との出会いを夢見たのは中学生の頃だった。高校時代には幾人かの友や師と出会いこれが邂逅なのかと思った。そしていつしかこの言葉を忘れていった。

大学卒業前、偶然にも社会学者への道を志すことになった。私は体育会系の行動派で、文献を精読して根気強く論文を書いていくといういわゆる学者のイメージとは異なっていた。そのため、進路を思い悩んだ時、両親にも先生にも友人たちにも反対された。だが、内定を受けていた会社への就職も断り

の想いのたけを静かに語ってくれた。それはじつにショッキングなもので、心に深く刻み込まれていった。その時に、何とはなしにライフストーリー法で聞きとりそれをもとに論文を書いたことが、その後の研究法を方向づけていった。この二つの出会いによって研究テーマは決まり、私のライフワークとなっていた。いま、ふつと邂逅という言葉を思い浮かべた。

三 敗戦後の満洲移民

「満洲国」建国後の一九三二年から四五年にかけて約二七万人が満洲に農業移民として渡ったが、「満洲国」崩壊後は様々なライフコースをたどった。多くは戦後の集団引揚げで帰国したが、一万人程が中国に残り、じつに八万人もが亡くなった。私が出会ったのは、集団引揚げで戦後すぐ帰国した引揚者と、日中の国交回復後に帰国してきた中国残留者であった。一方で、

大学院へ進学した。友人たちの心配どおり大学院ではこれといった研究テーマも見つからず、苦しんだ。ただフィールドワークという方法に出会い調査地に足繁く通った。幸運にも大学の専任講師となり、何とか研究者としての一歩を踏み出した。

二 満洲移民体験者、

中国残留日本人との邂逅

一九八四年八月一〇日を忘れることは出来ない。その日、私は「満洲」(以下括弧略す)に農業移民として渡った夫婦に初めて出会った。そして、その夫妻との出会いがそれ以降の私の研究者としての人生を決定した。その後その夫妻に会うことはなかったが、繰り返し

前者の多くは再び内地での戦後開拓に従事し文字通りの開拓生活を送った。他方で、後者は中国農村での厳しい生活に堪え忍んだ。前者からは、命から引揚げてきた後の戦後の日本での「引揚者」という烙印の下での生活や、人里離れた開拓地でのとても日本内地での生活とは思えないような開拓生活を聞きとり、後者からは敗戦後の中国で日本人として生きることの苦汁をなめつくした体験を聞きとり、その想像を絶する人生に驚愕した。

四 中国残留日本人という経験

農業移民として満洲へ渡った人達は内地から外地への移住で、いわば日本帝国の勢力圏内での人口移動であった。開拓地コロニーのなかでの「日本の生活」は、一面では越境者であったが、他面では越境者と言えなかった。しかし、日本帝国崩壊後に中国に残された生活は、偽満洲国や敗戦国民とい

しその出会いの場面や語りが私のなかに蘇り、その時受けた衝撃を噛みしめつづけてきた。一期一会でしかなかったこの出会いが、二五年経った今も私のなかに生き続けている。その時ちょうど私は三〇歳、大学教員となつて二年目の夏のことであった。

それから数年経ったある初夏の日曜日のことであった。私は初めて中国残留婦人と呼ばれる女性と出会った。木曾さんは残留婦人を支援する団体の呼び寄せで一時帰国しており、その支部の招きで熊本市に講演にきていた。木曾さんの話は、会場を埋める同年輩の初老の女性たちに訴えかけるかのように、「私は中国でも日本女性として恥ずかしくないように生きてきました」と語り、皆の涙を誘った。その姿が印象的で、帰省先の長野県まで押しかけ二日間わたつて話を聞かせてもらった。木曾さんは、その半世紀にわたる満洲、中国での体験とそ

う烙印を背負ったもので、文字通り越境者のそれとなった。(他方で、皮肉にも、引揚者たちも祖国にありながら戦後最初の越境者であった。)

敗戦後の日本は七年にわたつて占領されていたが、そこには敗戦の屈辱とともに総力戦からの解放もあった。一九五五年以降は高度経済成長があった。しかし中国に残された日本人には解放も経済的な豊かさもなかった。敗戦後、中国で日本人が生きているということの意味は想像を絶し、とりわけ文化大革命期には息を潜めて生きた。そして、彼女ら彼らのほとんどは国交回復後に日本に帰国してきた。ついで家族も呼び寄せ、定住化がすすんだ。これはいわば三度目の越境であり、帰国後の日本でも様々な生活課題が待ちかまえていた。中国残留日本人という歴史は、残留婦人や残留孤児本人の代で終わるのではなく、子、孫へと引き継がれているのだ。

どの故事から《互いによく心を知り合った友。親友。》（大辞泉【知音】）

とある。『蒙求』「伯牙絶絃」として、文人にはよく知られた故事成語であろう。

漢詩から小説へ

――『一夜』『猫』『草枕』『虞美人草』

春日静坐

青春二三月 青春二三月

愁随芳草長 愁は芳草に随つて長し

閑花落空庭 閑花空庭に落ち

素琴横虚空 素琴を虚空に横たう

蠲蛸挂不動 蠲蛸挂つて動かず

篆烟繞竹梁 篆烟竹梁を繞る

独坐無隻語 独り坐して隻語無く

方寸認微光 方寸に微光を認む

人間徒多事 人間徒らに多事

此境孰可忘 此の境孰れか忘るべけむ

会得一日静 会たま一日の静を得て

正知百年忙 正に知る百年の忙

遐懷寄何処 遐懷何れの処にか寄せむ

緬邈白雲郷 緬邈たり白雲の郷

明治三十一年（一八九八）三月

「蠲蛸挂つて動かず、篆烟竹梁を繞る」の一節が明治三十八年（一九〇五）に公開された『一夜』の叙景として、室内を蜘蛛が徘徊する様を評する際に作中内で引用される。さらに「会たま一日の静を得て、正に知る百年の忙」は、同じく『一夜』の主題と言うべき、クライマックスの一節、「また思う百年は一年のごとく、一年は一刻のごとし。一刻を知ればまさに人生を知る。」と展開された物語観／世界観そのものである。

また、本詩は『草枕』（明治三十九年／一九〇六）の「六」に創作過程が詳説される。

手掛りのない鉛筆が少しずつ動くようになるのに勢を得て、かれこれ二三十分したら、

『虞美人草』『三』（明治四十年／一九〇七年）の作中人物の甲野欽吾が作詩したものである。

甲野さんはここから書き始める。

鉛筆を執つて景気よく、

「一簾樓角雨、閑殺古今人」

と書いてしばらく考えている。転結を添えて絶句にする気と見える。

この詩想は、盛唐・王維「送元二使安西」「渭城朝雨裊輕塵 客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒 西出陽關無故人。」に通う。この詩の琴曲名は「陽関三疊」

青春二三月。愁随芳草長。
閑花落空庭。素琴横虚空。
蠲蛸挂不動。篆煙繞竹梁。
と云う六句だけ出来た。読み返して見ると、みな画になりそうな句ばかりである。
（略）しかし画に出来ない情を、次には咏つて見たい。あれか、これかと思ひ煩つた末とうとう、
独坐無隻語。方寸認微光。
人間徒多事。此境孰可忘。
会得一日静。正知百年忙。
遐懷寄何処。緬邈白雲郷。
と出来た。

「画になりそうな句ばかり」「画に出来ない情を、次には咏つて見たい」と言う感慨は漢詩で叙景を試みることにへの試行錯誤である。「素琴」は陶淵明の「無絃琴」であり、白楽天も愛用した詩語だが、ここでは文人趣味の愛玩物として詠まれたようである。早く『吾

である。

また、「垂柳」は「折楊柳」のこと。旅人を見送るときに楊柳の枝を折つて手渡す風習があったことにちなんで歌われた離別の曲であり、盛唐・王翰「涼州詞」は、「葡萄美酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催 醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回 秦中花鳥已應闌 塞外風沙猶自寒 夜聽胡笳折楊柳 教人意氣憶長安。」と詠じている。「胡笳」とともに「戦さ」を表象する常套的詩語ではあるものの、漱石の素養の奥深さが知られよう。



《琴》の文化史 東アジアの音風景

アジア遊学

126号

《七絃琴》は遣唐使によって中国大陸から日本にもたらされ、『源氏物語』や先行する『うつほ物語』、下つては江戸時代の漢詩・文人画に多大な影響を与えた。東アジアの琴文化受容の諸相を文学、歴史学、音楽史学などの多角的視点から考察する。

上原作和 企画

A5判並製・定価二二〇〇円（税込）

◆ 目次 ◆

- I 東アジア琴学史の構想
- II 日本古代音楽文化の成立
- III 王朝物語史の音風景
- IV 琴文化の中国と日本



『信長記』研究は終わらない

金子 拓

(東京大学史料編纂所助教)

このほど刊行した拙著『織田信長と
いう歴史』『信長記』の彼方へ』では、
共同研究の成果として、六十点前後の
『信長記』伝本を紹介した(これらにく
わえ十点前後の不明本がある)。これをも
とに、自筆本の成立経緯から写本の伝
来に至るまで、『信長記』という史料
を史料学的観点から検討し、書いた人
間、欲した人間、伝えた人間がそれぞ
れ『信長記』とどのように向き合っ
てきたのか、あれこれ考えをめぐらせた。
ところが、原稿を書きあげてから刊
行にこぎつけるまでの校正段階の短い
あいだにも、『信長記』や著者太田牛
一の別の著作に関する新たな伝本の発
見報告があいついだ。「あとがき」の
なかで、新たな伝本の発見と、それに

よる研究の進展への期待を書き記した
のだが、刊行前に現実化してしまった
ことに驚き、落胆というよりむしろ嬉
しさを感じている。

新出写本については、じっくり分析
する時間的余裕がなく、本文中で触れ
ることをしなかった。この場を借りて、
拙著の文字どおり「こぼれ話」として
これら新出写本を紹介したい。

『信長記』の特定部分を抜き出し一
篇に仕上げたいいわゆる「短篇」として、
信長の石山本願寺攻めを記したものが
ある。伝本には、天理図書館本・大谷
大学博物館本・聖藩文庫本のほか、信
長を「上様」と表記するため古態であ
ると推測した徴古雑抄本がある(拙著
第一章参照)。

筆者も同感である。

河村本は和田裕弘氏によつて見
だされた。尾張藩書物奉行なども勤め
た国学者・蔵書家河村秀頼(一七二八
―一八三〇)の旧蔵本中にあり、書写奥
書によれば牛一自筆本を延宝九年
(二六八二)に大澤繁久なる人物が写し
た写本である。巻末に慶長十二年(一六
〇七)應鐘(十月)十一日の日付と、加
藤与三右衛門尉の宛所がある牛一書
状が収められている。この書状が識語
がわりに冊子に直接書かれたのだらう
か。日付は蓬左文庫本奥書のちやうど
一ヶ月後にあたり、内容的にも蓬左文
庫本に近い。宛てられた人物は加藤清
正の家臣同重次(与左衛門)と推測され
る。

枋山本・河村本の二点は、『内府公
軍記』写本として貴重であるばかりで
なく、牛一の著作作成方法を知るうえ
でも重要な情報を含んでいる。

枋山本には末尾につづけて、「大閣

ここに徳川林政史研究所蔵『古案』
に収められた「太田牛一書付写」が新
たにくわわった。『古案』は平安時代
から江戸時代までの文書約千点を収め
る二十九冊の文書集で、このうち圧倒
的多数を占めるのが、今川義元・上杉
謙信・織田信長・豊臣秀吉・徳川家康・
前田利家ら大名の発給文書である(『徳
川林政史研究所紀要』三九号に解題および目
録あり)。なかにはこれまで知られてい
なかった文書もいくつか含まれている
ようだ。

「太田牛一書付写」はこのうちの第
十八冊に収められている。第十八冊は
「福住」という表題があり、江戸時代
の蔵書家・考証学者福住道祐所蔵史料
を書写したと考えられている。内容的
には、漢字・仮名など用字の異同をの
ぞけば徴古雑抄本とほぼ同内容で、信
長を「上様」と呼ぶ点、古態といつて
よい。

『古案』収録文書のうち何点か『徴
秀吉公軍記ノ内』として、天正十三
年の秀吉による紀伊根来寺攻めの記事
と、『織田弾正忠信長公記録之内』と
して、前述した信長の本願寺攻めの記
録が抄録されている。河内叡福寺に贈
られたという性格を考えれば、周辺地
域の寺院をめぐる合戦をとくに抜き出
して書きくわえたとも考えられ、『ア
ンソロジスト』牛一の一面をうかがう
ことができる。

牛一自身が『信長記』の書名をどの
ように呼んでいたのかはなお謎として
残されたままだったが、ここで彼が「織
田弾正忠信長公記録」と書いているこ
とは、その問題を考えるうえでの有力
な手がかりとなるだろう。

河村本は前記した牛一書状に、加藤
と牛一が寺嶋久右衛門(豊臣家臣)宅の
茶会で会い(旧交を温め?)、翌日今度
は牛一宅に加藤が招かれ茶会をともに
した礼が記され、「貴国之家苦」とし
て一冊所望されたので、これを進呈す

るといったいきさつが書かれている。牛一晩年の交友、著作の製作動機を知る重要な史料である。

これから新出諸伝本については、今後検討を重ね、いずれ刊行を予定している牛一著作の翻刻史料集（牛一全集にて成果を反映させたい。それまでもなお新出伝本の出現があるかもしれない、伝本情報を得るためのアンテナの感度は落とさないつもりである。



織田信長という歴史

『信長記』の彼方へ

金子 拓著

四六判上製・定価三九九〇円（税込）

信長の生涯は、いかに記録され伝わったか――

信長の家臣太田牛一が著した『信長記』。複数残る自筆本や写本の系統分類と比較検討をとおして、成立・伝来に関わった中世末から近世にかけての人びとの歴史に対する向きあひに迫る。



◆目次◆

- 序章 『信長記』とは何か
 - 一 歴史叙述としての『信長記』／二 『信長記』研究の歴史
- 第一章 『信長記』の諸伝本と系統
 - 第二章 軍記作者太田牛一
 - 一 信長以前・信長時代の牛一／二 秀吉時代の牛一／三 記録作者としての太田牛一
 - 第三章 池田家本系『信長記』の諸本
 - 一 自筆本池田家本／二 池田家本系の写本（一）――聖澤文庫本系／三 池田家本系の写本（二）――非聖澤文庫本系
 - 第四章 『信長記』を求めた人びと
 - 一 池田家と『信長記』／二 『信長記』の評判
 - 第五章 建勲神社本系『信長記』の諸本
 - 一 自筆本建勲神社本について／二 建勲神社本系の写本について
 - 第六章 ふたつの太田家とその伝本
 - 一 個人蔵本／二 太田家本／三 加賀太田家に伝来された本
 - 第七章 『信長記』と織田家
 - 一 織田長清と牛一自筆本の出会い／二 佐々宗淳と『信長記』／三 『織田真紀』と織田長清
 - 終章 『信長記』の彼方へ
 - 一 『信長記』の成立／二 『信長記』に関わった人びと

ネットワーク時代にふさわしい図書館情報学

緑川 信之

（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授）

『ネットワーク時代の図書館情報学』は、図書館情報学をネットワーク時代の新しい視点で見直そうという試みであり、全十一巻を予定している（以下の本文中に『』に入れて示したが、まだ執筆段階のものもあり、書名は仮である）。

図書館情報学の基本図式

図書館情報学の概説書やハンドブックの構成を整理すると、総論／利用者・情報要求／情報メディア／組織化・蓄積・検索／図書館のサービス・運営、となる。図書館や情報の利用者がいて情報要求を求めている、彼らの情報要求を満たすのは情報メディアである、情報メディアを利用しやすくするために組織化を行い、蓄積し、蓄積された情報

メディアを検索して利用する、そして、情報メディアの組織化・蓄積・検索を行ってきた代表的な機関が図書館である。この図式は本シリーズでも基底となっている。

たとえば、『情報行動』は利用者・情報要求、『電子ジャーナル』は情報メディア、『ネットワーク時代のメタデータ』は情報の組織化、『利用者志向のレファレンスサービス』は図書館サービスを扱っている。他の本も上記の図式のどこかに入れることができる。では、どこが本シリーズの新しい視点なのか。

電子ネットワーク技術

まず最初に注目したのが「技術」で

ある。特に最近では電子ネットワーク技術の進展が著しい。先に見た『電子ジャーナル』はまさに電子ネットワーク化された情報メディアであり、『情報行動』も『メタデータ』も『レファレンスサービス』も電子ネットワーク化された情報メディアを無視して語ることはできない。こうした電子ネットワーク技術は、『ウェブに浮かぶ図書館』や『ウェブページの判別とウェブマイニング』、『情報ネットワークの可視化と高度アクセス』などを可能にする。

その一方で、『デジタル画像と書物研究・グーテンベルク聖書を例に』や『ネット上に「文学」は存在するか？』のように、写本、文学といった伝統的な情報メディアの研究領域に新しい考え方、手法を持ち込む。さらに、『情報管理と法』のように、情報に関わる法律や権利の問題にも影響を及ぼしている。

ネットワーク時代の図書館情報学一〇月刊行開始

利用者志向の

レファレンスサービス その原理と方法

齋藤泰則 著

四六判並製・定価二〇〇円(税込)

インターネット時代の司書に求められる役割とは? レファレンスサービスの目的は、「会話」によって図書館員が利用者の課題解決を支援することにある。ネットワーク上の情報源が増大する時代にこそ、レファレンスサービスには、より高度な利用者指向の人的支援が求められている。

図書館はコミュニティ

創出の「場」 会員制ライブラリーの挑戦

小林麻実 著

四六判並製・定価二〇〇円(税込)

六本木ライブラリーの取組みと新たな図書館像。これまでの図書館は、特定の地域や学校、企業などにサービスを提供する存在だった。21世紀の図書館は、利用者みずからが新たなコミュニティを創設する場であるという事例を紹介する。



個人化・ネットワークコミュニティ化

電子ネットワーク技術の進展によって個人化・ネットワークコミュニティ化も進む。一人一人が情報の発信者になれる(『ウェブ上の文学』)、図書館などの情報サービスは一人一人の特性に応じて提供されるべきだという考え方もでてきた(『ウェブに浮かぶ図書館』情報ネットワークの可視化と高度アクセス)。

その一方で、クラウド化や集合知という言葉で代表される、電子ネットワークを通じて不特定多数の人々のコミュニティが形成されている(『ウェブページの判別とウェブマイニング』)。

記録を守り 記憶を伝える

歩み始めた学習院大学大学院「アーカイブズ学専攻」――

安藤 正人

(学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻主任教授)

日本初の「アーカイブズ学専攻」

日本で初めて「アーカイブズ学専攻」を名のる大学院課程が学習院大学に設置されて一年余りがたった。

文書、映像、音声、電子データ――私たち人間は、過去から現在までさまざまな記録を生み出してきた。記録は人々の歩みを証拠づける重要な歴史資料であると同時に、適切に保存されれば、新たな創造的活動を生み出す情報資源ともなる。これが「アーカイブズ」archivesである。では、国や地方公共団体から、企業・学校・民間団体などまで、あらゆる組織体や個人の記録を、人類共有の「アーカイブズ」としてどのように保存・活用していけばよいのか? その理論や技術を研

こうした電子ネットワークによるコミュニティの形成が進む中で、現実社会の中で情報を共有しあらたな知識・技術・活動を産み出していく「場」としての図書館も見直され始めている(『図書館はコミュニティ創出の場』)。

ネットワーク時代の図書館情報学

これまでの図書館情報学の概説書は、図書館にこだわらずに広い視野で図書館情報現象を扱う立場で書かれているが、それでも、図書館という「館」を中心に据えて、そこから周辺を取り込んでいくという印象は拭えない。こ

究する学問分野が「アーカイブズ学」archival scienceである。

学習院大学大学院アーカイブズ学専攻は、アーカイブズ学の研究と、アーカイブズの保存・活用を担う専門職であるアーキビスト archivists の養成を目的として、二〇〇八年四月に第一歩を踏み出した。博物館や図書館、あるいはその他の史料保存機関で学芸員やアーキビストの業務についている社会人、これまで政治学や歴史学を学び新たなアーカイブズ学研究をめざす学生など、一、二期生合わせて二〇人(修士課程一六人、博士課程四人)が、アーキビストやアーカイブズ学研究者への道をめざして、新しい学問に取り組んでいる。

これは、「図書館学」から「図書館情報学」へと領域を拡大したという歴史的経緯から来ていると考えられる。しかし、いまやその歴史的経緯にこだわらずに、図書館情報学を別の視点から見直してもよいのではないか。そこで本シリーズでは、「館」ではなく「技術」に、そして情報利用・提供の個人化・ネットワークコミュニティ化に注目して全巻を構成した。これまでに培われた伝統の知識・技術を再確認し、ネットワーク時代にふさわしい図書館情報学を創造するための第一歩となることを期待したい。



「アーカイブズ学専攻」がめざすもの

学生は、「アーカイブズ基礎理論」「アーカイブズ資源研究」「アーカイブズ管理研究」の三本柱からなる(コア科目)を中心に、「(学際科目)」と(応用科目)を学ぶ。本専攻がとくに重視しているのは、(1)歴史性と現代性の融合、(2)理論と実践の調和、(3)学際性、(4)国際性、の四点である。たとえば理論と実践の調和という面では、修士課程の学生にアーカイブズ機関での実習を一、二年次各二週間義務づけているほか、国内各地や国外(オーストラリアなど)での史料調査プロジェクトに参加してもらうなど、実務の現場に接する機会を多くするよう心がけている。また、学際性・国際性という点では、博物館などを含む国内外アーカイブズ関連機関への訪問研修(二〇〇八年度は沖繩研修と韓国研修を実施)や、海外の専門家による特別授業(二〇〇八年度はテキサス大学のデイビッド・グレー

メールマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら

シー教授を招へい」などを積極艇に行っている。

二〇〇九年度は、アムステルダム大学名誉教授で元オランダ国立公文書館長のエリック・ケテラール博士を招へいし、公開講演会や特別授業を実施する。公開講演会は次の通りである。アーカイブズ学の国際的リーダーの一人であるケテラール博士の話をぜひ多くの方々に聞いていただきたいと願っている。



学習院大学大学院アーカイブズ学専攻主催

「エリック・ケテラール博士講演会」

元オランダ国立公文書館長でアムステルダム大学名誉教授のエリック・ケテラール博士の「記録のパフォーマンス・パワー」を開催します。記録が単なる歴史事実を確認する手段にとどまらず、人間の新たな創造的活動を生み出す大きな力を持っていることについて、一般向けにお話しいただきます。

・日 時：二〇〇九年一〇月二四日（土）15:00～17:00
 ・会 場：学習院大学南三号館二〇一教室（山手線目白駅下車）
 ・講演者：エリック・ケテラール博士

（アムステルダム大学名誉教授・元オランダ国立公文書館長）

・講演題目：「記録のパフォーマンス・パワー」（通訳付き）

・入場料：無料

・問合せ先：学習院大学大学院アーカイブズ学専攻事務局

電話 03(3986)0221（内線 3817）

＊講演会に先立ち、13:30から同じ場所

入試説明会を開催します。

＊詳しくはアーカイブズ学専攻

ホームページをご覧ください。

www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/



⇒ 目次に戻る

日本近代文学と宗教

綾目広治

自殺行為の補陀落渡海

井上靖に「補陀落渡海記」という短編小説がある。これは伝説として伝わっている僧侶金光坊の話をもとにして書かれた小説である。補陀落渡海とは、観音菩薩が住んでいるとされる補陀落浄土に行くことである。渡海は、

生きながら浄土に行くのであるから、仏に仕える身としては願ってもない幸せなことなのである。建前としてはそうである。しかしながら、浄土への渡海とは言え、僅かな食糧だけを持つて小さな一人乗りの舟に乗って大海に出て行くわけだから、実際には途中で転覆して水死するか、あるいは餓死することになる自殺行為であった。にもかかわらず、根井浄氏の『補陀落渡海

史』によると、この補陀落渡海に、紀

州の補陀落寺や他の太平洋側にある

寺、さらには日本海側の寺からも何人

もの僧侶が試みている。渡海のピークは十六、十七世紀であった。

井上靖の宗教観

「補陀落渡海記」では、住職が三代続けて六十一歳で渡海を試みていた那智の補陀落寺の、その現住職である金光坊の苦悩が描かれている。金光坊は、いずれ自分も年老いてから渡海せざるを得ないと決心していたものの、六十一歳はまだ早いと思っていた。むしろ六十一歳の渡海の日が近づくにつれ、生きていることの喜びを改めて実感するようになる。しかし、渡海

を期待する周囲の圧迫から、生への執着を捨てきれない金光坊も厭々ながら舟に乗りざるを得なくなり、結局は渡海させられるのである。人間を救うはずの宗教が、逆に人間を苦しめているわけで、おそらく作者の井上靖は、宗教は極端な教理や突き詰めた信仰によって、現世を否定したり人間に過酷なことを強いるような過激なものであるべきではなく、死者の霊を慰め、また生きている人間にも慰めと励ましを与えるようなものでいいのだというテーマを、この小説に込めていたと思われる。宗教についてのそのような井上靖の考え方は、後の長編小説『星と祭』などからも窺われる。

小川洋子と金光教

私は『小川洋子——見えない世界を見つめて』で、小川洋子の文学と金光教との関係についても論じたが、おそらく小川洋子は井上靖の考え方に同意

メルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら

するのではないかと思われる。小川洋子がエッセイ「祈りながら書く」で、「金光教を捨て去るのは不可能だと気づいた。わざわざそんなことをする必要などない、という表現の方が適切だろうか」と述べ、「精神を支える背骨としての金光教」ということを語っているのも、宗教は人がこの世で生きていく上での一つの拠り所になってくれるものでいい、と考えているからであろう。このように小川洋子が語ることができるのも、金光教自体が信者を教義によって縛る原理主義的な宗教ではなく、また布施を強要するような、まさに教祖たちにとって現世利益的な宗教でもないからであると考えられる。かつて高橋和巳は小説『邪宗門』で体制に歯向かう新興宗教集団「ひのもと救霊会」を描いたが、金光教にはそのような政治性もない。金光教は穏やかな新興宗教であって、その教えも言わば人生における日常倫理を語るものな

のである。そういう性格は小川洋子の文学と親和的だと言えよう。

二十一世紀の宗教と文学

金光教は、一般に思われているより小川洋子の文学に大きな影響を与えているのではないかと考えられるが、実は他の日本の作家たちにとっても、宗教もしくは宗教性というものが意外に大きな要素を占めているのではないだろうか。もちろんこれまでも、たとえば椎名麟三、遠藤周作とキリスト教との関係、倉田百三や野間宏と親鸞との関係、武田泰淳と仏教との関係などについて論じられてきた。それは彼ら作家たちが宗教の問題を小説のテーマとして扱ったり、自らと宗教との関係を語ったりしていたからでもあるが、しかしそのように作家が明言していない場合でも、宗教的な問題や事柄と日本近代文学の作家たちの文学とは、大いに関係があるのではないだろうか。

その関係を考える時には、宗教を狭く捉えるのではなく、阿満利磨が『日本人はなぜ無宗教なのか』で語っているように、宗教というものを広く捉え直さなければならぬだろう。そのためには作家や私たちの意識の深層あるいは古層とでも言うべき部分を掘り下げなければならぬ。二十一世紀は新たに宗教の時代だと思われる。少なくとも宗教が大切な問題として意識される時代ではないかと予想される。日本近代文学の研究においても宗教の問題が重要になってくるのではないだろうか。小川洋子の文学を論じながら、私はそういう思いを強く持った。



⇒ 目次に戻る

新鋭作家論叢書

これまで本格的に論じられることのなかった現代・新鋭作家を対象に、次世代の文芸評論に先鞭をつける「はじめての評論」。

小川洋子 見えない世界を見つめて

綾目広治 著

四六判・定価 三三〇円 (税込)

〈物語の力〉を信じてつづける作家は閉塞した現代小説を乗り越えられるか。

『博士の愛した数式』『ホテル・アイリス』『ミナノの行進』などで知られる人気作家の作品世界をわかりやすく解剖し、その創作の秘密に迫る。

第一章 モラトリウムと抽象的な空間

―『揚羽蝶が壊れる時』『完璧な病室』

第二章 過食症と拒食症

―『ジュガータム』『妊娠カレンダー』

第三章 〈異界と記憶〉の物語

―『冷めない紅茶』『余白の愛』

第四章 もう一つのレールと記憶の消滅

―『アンジェリーナ』『密やかな結晶』

第五章 性愛の世界と異能の人

―『やさしい訴え』『凍りついた香り』

第六章 〈善意と記憶〉の物語

―『沈黙博物館』『博士の愛した数式』

第七章 金光教の〈取次ぎ〉と作家の役割

第八章 〈小さな物語〉論

第九章 新たな展開の模索

―『ミナノの行進』『猫を抱いて象と泳ぐ』

*好評既刊

村上龍 「危機」に抗する想像力

黒古一夫 著

四六判・定価 三三〇円 (税込)

この国の「危機」を描き続けた村上龍は、いつから「希望」を口にするようになったのか。現代日本を代表する作家の素顔が、いま明らかに。



*十一月月上旬刊行予定

柳美里 〈柳美里〉という物語

永岡杜人 著

四六判・定価 三三〇円 (税込)

孤高の道を歩む柳美里を徹底的に分析・評論。特異な作家の軌跡を主要作品とともにたどる。

*続刊予定

『川上弘美』

『津島佑子』

『目取真俊』

『田口ランディ』

『吉田修一』

『桐野夏生』

『島田雅彦』

『奥泉 光』

ネットワーク時代の図書館情報学

これまでに培われた伝統の知識・技術を再確認し、ネットワークの時代にふさわしい図書館情報学を創造する。

*続刊予定

ネットワーク時代のメタデータ

谷口祥一

ウェブに浮かぶ図書館 広がるサービス―

宇陀則彦

加藤信哉

三輪真木子

電子ジャーナル

情報行動

ネットワーク情報の可視化と

高度アクセス

情報管理と法

ウェブページの判別と

ウェブマイニング

グリーンヘルク聖書と

写本の伝統

ネットワーク文学

安形麻理

黒古一夫

(※いずれも仮題)



てんぶらの語源 (二・考証)

『すらんぐ』(てるおか・やすたか著) 続貂

小林祥次郎

ここまでをスペイン語の専門家である寺崎英樹氏に見ていただいたところ、次のご示教を得た。以下は寺崎氏からの私信の抜粋である。

有力と思われるポルトガル語説(ないしスペイン語説)ですが、その語源に関しては四説に分かれるようです。

- (1) *tēporas* 「齋時」に由来する。
- (2) *tempero* 「調味料」に由来する。
- (3) 「料理」を意味する *temperar* に由来する。
- (4) スペイン語 *templo* 「寺院」に由来する。

巷間では孫引きに次ぐ孫引きが行われ、これらの説が交錯して突拍子もない語源解説が行われている場合もある。

「日」の意味なので、あえて複数形を想定する必要もないでしょう。語源的にはラテン語の *tempus* 「時間、時期」の複数 *tempora* に由来します。

四季の齋日(ラテン語では *quattu tempora*)とはカトリックの慣習で。年四回、定められた三日間信者が罪を償い、大齋・小齋を守ることになっています。大齋とは本来断食を意味しますが、実際には昼は普通に食べ、朝夕は食事を減らす。小齋とは鳥獣の肉を避ける定め、魚は食しても差し支えないとされます。この時期に南蛮人が肉を断ち、魚を油で調理して(フリッターなど)食べたということは十分あり得ることでしょう。仏教で言えば精進料理の類いですが、精進揚げという言い方は歴史的には関係ないのでしたが、興味深いところですね。

以上が寺崎氏のご意見。教えてもらって、いつそう八幡の敷知らずに迷

り、ポルトガル語をろくに調べもせず、幻のポルトガル語をでっち上げている例もあるようです。

これらの説を比較検討すると、まず(4)説は別にスペイン語を持ち出さなくても、ポルトガル語でも同形であるから、ポルトガル語の *templo* テンプル「寺院」としても良いはずですが、「寺院」の意味がなぜテンブラと結びつくのか納得の行く説明は困難であり、『言海』が自ら言うとおり牽強と言うしかないでしょう。

(3) *temperat* テンペラールは「調理する」という語義を与えている書が多いが、むしろ「味付けする」の意味です。多数説になりつつあるかに見える(2) *tempero* テンペル(調味料)の語基と

いこんだような気持ちだが、最初の『蜘蛛の糸巻』のものは魚であつたし、『歌仙の汲糸』のものは魚だつたことからすると、*tempora* 「齋日」とする説に従いたいようになってきている。『嬉遊笑覧』の砂糖を掛けた菓子がテンブラで、魚の揚げ物を言うのはそれに似ているからだというのは、本末転倒なのだろう。『食道記』などの鳥のミンチの餡かけの「てんふらり」は、仕方ないから別のものとしておきたい。

明治四年に出た仮名垣魯文の『安愚楽鍋』(初編)に、袖時計(懐中時計)の金鎖が「きんのでんぶらと見えたり」とあるのは、鍍金したもののこと。テンブラは中身が衣で隠れることから言った。昭和の初めころには、にせ学生もテンブラと言った。学生が制服を着ていたころに、制服を着て外見だけはそれらしいにせ物だから、テンブラだ。

考えられるが、「味付けする」とか「調味料」がテンブラという特定の料理と結びつく十分な理由があるとは思えません。そもそもテンブラは衣を付けて油で揚げるだけで、特別の調味料を使う料理ではありません。またテンペルは語音もあまり似ているとは言えませんが、動詞テンペラールは音が似ていると言えなくもないが、動詞形が借用されたとしたらきわめて異例であり、こじつけというしかないでしょう。

残るのは(1)説です。この説の元祖の『大言海』はスペイン語・イタリア語としているようですが、歴史的に言つて *tempora* テンボラとした方が可能性は高そうです。著者によつては *quattro tempora* 「四季の齋日」から来たと説明している場合もあります。しかし、*quattro* 「4」がなくても、「四季の齋日」の意味になるので、無理に *quattro* を復元する必要はないでしょう。また *tēporas* は複数形であり、単数でも「齋

ついでに、揚げ物をいくつか記しておく。

『言海』の「あげもの」の項に、「別チテ、菜蔬ナルヲしゃうじんあげトイヒ、魚介ナルヲてんぶらトイフ」とある。『守貞謄稿』(食類)に、「菜蔬の油揚げは江戸にてもてんぶらと云はず、あげものと云ふなり」とする。「精進揚げ」の説明は、落合直文『ことばの泉』(明治三十一年)に「野菜類のあげもの。多く、仏事などの時に用ゐるもの。」とあるのが簡潔で要を得ている。醤油・味噌などに浸けた肉や魚を片栗粉などでまぶして油で揚げたのが「龍田揚げ」だ。

奈良県の北西部を流れる龍田川は、嵐吹く三室の山のみぢ葉は龍田の川の錦なりけり

能因法師

(後拾遺集・秋下・三六六)

日本古典博物事典 動物篇

小林祥次郎 著

A5判上製・定価九九七五円（税込）



文献の大海から躍り出る動物たち――

日本人は動物たちをどのように感じてきたのか、自然とどのように向き合ってきたのか？

古代から近現代まで多種多様な文献を博捜し、日本人の心性を明らかにする画期的な大事典。



畜獣◎犬・猫・鼠・兎・猿・鹿・狼・狐・狸・
禽鳥◎からす・鴨・うぐいす・おしどり・
燕・雀・鶯・孔雀・鷹・
虫介◎蛇・蚕・蝶・蚊・蠅・トンボ・
ごきぶり・まむし・鈴虫・蜂・
竜魚◎鯉・鮒・鯰・鯛・鮫・くちや・なまこ・鰻・鮪・
など、約1000種を掲載。



などの歌で知られる紅葉の名所、「龍田揚げ」は醤油に浸けて揚げた肉が赤っぽいのを紅葉に見たて、その名所を名前にしたものだ。古典を踏まえた典雅な名だ。

この「龍田揚げ」が辞書に載るようになったのは、かなり新しい。昭和四十七年に第一巻が出た『日本国語大辞典』の第一版には出ていない。『広辞苑』では昭和五十八年の第三版から

出るようになった。大きめの辞典では、昭和五十六年の『小学館国語大辞典』に載るのが最初か。

『日本国語大辞典』に読者から寄せられた情報では、昭和二年刊の秋穂敬子『家庭料理』に「竜田揚げ」があり、身の締った魚を醤油に浸けて胡麻油で揚げるとあると、小学館の神永暁さんから教えられた。料理の世界では知られていたのに、辞書に載るまでにはだ

いぶ時間がかかったことになる。揚げ物ではないが、寛延二年（七四九）刊の『料理山海郷』（四）に、大和芋を湯で煮て紅葉の形に切り、梅酢に漬けたものを小口切りにした「龍田川」という料理が出ている。



⇒ 目次に戻る

大東急記念文庫蔵

十月二十三日発売

芥子園画伝 初集二集三集



大東急記念文庫 編
菊倍判変型・クロス装・函入・三冊組分売不可・
定価一五二〇〇円（税込）

東アジア絵画史を決定的に変えた多色刷りの一大画譜

画論、絵画史、技法を説き、実作例を豊富に示して、制作の実践と理論の両面で絶大な影響を残した大ベストセラーの国内最善本を、最先端の論考を添えて、原寸原色で再現。

◆ 内容構成 ◆

大東急記念文庫の六十年と『芥子園画伝』 財団法人大東急記念文庫

芥子園画伝 初集 巻一〜巻五

芥子園画伝 二集 蘭譜・竹譜・梅譜・菊譜

芥子園画伝 三集 草虫花卉譜 上冊・下冊

翎毛花卉譜 上冊・下冊

解説 中国画譜の集大成―『芥子園画伝』初集・二集・三集の全貌―／小林宏光

『芥子園画伝』―迷宮と伝説と―／岡崎久司

石濤と『芥子園画伝』／西上 実



◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換払*・クレジットカード**等がご利用いただけます。
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

① 銀行振込の場合

三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュッパン (カ

② 郵便振替の場合

00120-3-41856 勉誠出版株式会社

* 代金引換払の場合、さらに 315 円かかります。(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

** クレジットカードのご利用は、当社サイトにてのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。

現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書きいただければと存じます。

◆ 執筆分量…誌面二頁（一五〇〇字程度）ないし三頁（二三〇〇字程度）
写真などが入る場合は、文字数をそのぶん減らしてください。

四〇〇字を目安に、適当な小見出しをお付けください。

◆ その他…適当なタイトルをお付けください。肩書きをご連絡ください。

◆ 入稿形式…テキスト形式（ワード、一太郎形式も可）

◆ 校正…原則として校正は無しとさせていただきます。

◆ 謝礼…ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。
ポイントとは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問い合わせおよび送付先…mnmtf@bensey.co.jp
メールアドレスに「勉誠通信用原稿」と明記してください。

編集後記

先週はわたしの住む街で選挙がありました。このところ選挙続きです。投票日が近づく、いつも決まって恩師を思い出します。

女子大出身のわたしは、講義のなかでたびたび「女性参政権獲得」の経緯について聞かされたものです。現代ではすっかり、歴史の中のひとつの出来事で、「古くさい」と感じてしまうほど、当たり前の権利となりました。

投票をして初めて行使出来る権利であることを忘れず（税金の使い道についていつでも文句が言えるよう！）、これからも欠かさず、投票所へ足を運びたいと思います。